連載:留学前に教えてほしかったアメリカ大学院の仕組みと仕掛け
(3) 教員目線でこっそり教える大学院のお金の話

東京大学
加藤 雄一郎

この連載ではアメリカ大学院留学を目指している人を読者として想定してアドバイスをまとめています。初回の記事ではアメリカ大学院合格の鍵となる推薦状について解説し、前回の記事では大学ランキングと志望研究室の選び方について書きました。最終回の今回は、大学院入学後にきっと(ちょびっとだけ?)役に立つ、お金の話をします。

移民の国、アメリカ

アメリカの大学院には世界中から留学生が集まってきます。「世界代表」とも言えるメンバーの中で切磋琢磨できる環境はアメリカならではのものです。学生ビザを取って渡米し、学位をとった後は就業ビザに切り替えて働き、しばらくすると永住権を取得して、最終的には市民権(アメリカ国籍)を得る、というシナリオを描いている中国やインドなど新興国の学生も多く、宗教や人種の区別なく優秀な人を集めているこの移民の国が活気にあふれているのも不思議ではありません。

しかし、多様な価値観を持つ人達を受け入れるということは、価値観のぶつかり合いがよく起きるということでもあります。そこで、どのような価値観を持つ人でも受け入れられる「価値の軸」として、お金、というものが重宝されています。つまり、最終的にはお金という軸に落として判断をするのがフェアだ、という考え方です。身も蓋もないように聞こえますが、移民の国ならではの知恵なのです。もちろん、大学院でもこの考え方が様々な場面で反映されています。

大学院生の値札

初回でも少し紹介したように、教員は自分の研究室の学生の学費とresearch assistant (RA、研究補助員)としての給料を研究資金から負担します。ですから、支払う研究費に見合う成果を出してくれそうな学生かどうか、というのが入学審査における重要な基準になります。

ところが、「支払う研究費」というものは様々な要因で増減します。外部の奨学金を持っている学生であれば、その分だけ教員の払わなくてはいけない給料が減るので、合格する可能性が高くなります。よって、奨学金を取れた場合は、志望理由書や願書の中でどのような条件の支援が受けられるのか、金額や期間を明記してしっかりアピールすることが大事です。また、アメリカ国内出身の学生には連邦政府から補助金が出るほか、州立大学では州民の学費は安く設定されていることが多く、国内学生は有利です。逆に、特別に優秀な学生が応募してきた場合、普通の待遇にプラスして大学側が奨学金を支給するオファーを出すこともあります。他の大学院より好条件にして、良い学生を勝ちとるためです。

このように、給料や奨学金といった条件は学生にとっても重要な判断材料なので、合格通知には必ず金額が明示されています。もちろん、ポスドクなどのオファーでも同じです。きちんと書かれていなかったら、問い合わせてすべての条件をしっかり確認してから回答しましょう。それがアメリカの常識で相手も当然だと思っているので、遠慮する必要はありません。また、魅力的なところが複数あって迷っている場合は、その旨を相手に伝えておくと、より良い条件を提案してくれるかもしれません。大学側が欲しがる優秀な学生であれば、条件は交渉可能な場合があるのです。

入学以降

さて、お金の話は入学審査でも重要ですが、入学以降もやっぱり大事です。入学したばかりで研究室に所属していない場合は、teaching assistant(TA、教育補助員)の業務をして給料を出してもらいますが、この場合は資金の出元は各学科になります。TAをやりながら研究室でも働く場合は、教員としては給料を負担しなくても済むのでとても助かります。ただし、TAの業務は時間を取られることも多いので、研究志向で潤沢な研究費を持つ教員の場合は、逆に敬遠されることもあります。TAをやってみたかったのに機会がなかった、という人は、教員が研究費で困っていそうなときに「私がTAやりましょうか」と提案すると喜ばれるはずです。(むしろ、教員の方から「今年はお金ないからみんなTAやって!」というケースのほうが多そうですが・・・。)

Fig 1. 当時カリフォルニア州知事だったシュワちゃんのサイン入りディプロマです。

収入面ではTAとRAに大きな差はありませんが、TAとRAとを同時にやっても収入は倍にはならず、多少の上乗せ程度というのが一般的です。大学院の専攻が卒業要件としている場合を除けば、TAは主に指導教授がRAとしての給料を支払えない場合に行うことが多いです。まだ所属研究室が決まっていないことが多い1年目は学部が生活費を負担することもありますし、留学生の場合はまだ英語で授業を担当するのが難しいということもあり、TAは2年目以降に受け持つ場合が多いようです。(編集部)

学生の方からは見えにくいお金の話もあります。それは、間接経費というもので、実は研究費の支出の内、給料や消耗品費などの三割程度の金額を大学に納めることになっています。光熱水費や事務経費など、研究に必要な経費の内、大学が組織として負担している分を払わないといけないのです。つまり、年間3万ドルの給料を払うということは間接経費を約1万ドルも追加で払う事になるのです。初回の記事の謎解きをしておくと、学費3万ドル・給料3万ドル・間接経費1万ドル、合わせて一年で7万ドルなので5年間だと35万ドルになるということです。

一般的な話かどうかは不明ですが、私が学生だった時に聞いた話では、大学院7年生以降は給料にかかる間接経費の割合が毎年更に高くなるそうです。シニアで研究能力の高い学生の卒業を教員が引き止めないよう促すために、このような仕組みで対策をしているようです。同じように、qualifying examを経て博士候補生になった学生については間接経費を減額することで、早く合格してもらうため教員が学生のqualifying examにより協力的になるように促しているという話でした。

おわりに

アメリカの大学院は入るのも大変、入ってからはもっと大変なところです。でも、私にとって大学院の後半は楽しいことばかりでした。学位取得の目処も立ち、100%研究に没頭して効率よく成果を出すことが出来て、実力主義のアメリカは実力があれば天国のようなところだ、と感じた時期です。目的は人それぞれでしょうが、ひとりでも多くの方が充実した留学生活が送れますように・・・。

加藤 雄一郎
東京大学 工学研究科 総合研究機構 准教授
University of California Santa Barbara Ph.D. 取得

現在の研究テーマであるカーボンナノチューブ光デバイスに関する研究が中心ですが、私の個人ページに留学関係の過去の文章が掲載されています。
http://ykkato.t.u-tokyo.ac.jp/

米国大学院学生会 http://gakuiryugaku.net/

【ニュースレター編集部】

原 健太郎　石原 圭祐　高野 陽平
山田 亜紀　辻井 快

newsletter@gakuiryugaku.net

執筆者を募集中！

編集部では、ニュースレターかけはしに掲載する記事を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記のメールアドレスにご連絡下さい。また当学生会の他の活動（留学説明会、メンタープログラム）に興味のある方は、当会の学位留学経験者オンライン登録システムに参加お願いします。
http://gakuiryugaku.net/mp/mentor/login.php

編集後記

米国大学院学生会の Facebook ページができました。 http://www.facebook.com/gakuiryugaku
こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くと Wall に書き込みできるようになります！

留学中の大学院生にとって授業のない夏は研究の最盛期であるとともに一時帰国の時期でもあります。しかし帰国中、実験途中の植物の水やりをどうしたものか?サンプリングはどうしたものか?悩みは尽きません。こんなとき、重宝するのが信頼できる学部生の助手。そんなわけで、僕は今安心して日本に向かって飛んでいます。もちろんお土産はちゃんと買って帰ります。(辻井)

夏学期のTAもあっという間に終わりました。学部のTAは苦労も多かったのですが、前回も書いた通り「素朴な疑問を持つ」という大事な事を再認識できた貴重な機会でもありました。期末試験の後、何人かの学生が「ありがとう」と握手をしてくれた時は少しジーンときました… さて、前回からのチーズ話の続きですが、固いモッツアレラの正体はプロヴォローネ(Provolone)チーズの一種ではないか?という話を聞きました。モッツアレラをさらに熟成させたものがプロヴォローネという説明でしたが、二つのチーズは類似点もあるのでありえる話だとは思います。しかしまだしっくりこない部分もあるので、さらに調べていきたいです。ちなみにプロヴォローネはアメリカでは良く耳にするポピュラーなチーズの種類ですので、覚えておくとサンドウィッチ屋さんなどで使えます。(高野)

アメリカのどの地域の大学院に行こうが、ランチセミナーでピザが出ることは全国共通でしょう。無料の昼食なので、学期中は気がつくと週２回くらい無自覚にピザを食べていたりします。

最近、ピザ食べてないな、とふと思い、よく考えてみたら、今は夏休みでピザの出るセミナーシリーズがお休み中。普段すすんで食べるものではないことがよくわかります。新年度が始まると同時にまたセミナーで出てくるピザは、３ヶ月ぶりなだけに一層おいしく感じられるものです。そこで、僕は密かに９月こそ、ピザの旬の時期だと決め、解禁日を待ち望んでいます。(石原)